

錢形平次捕物控

ガラツ八祝言

野村胡堂

青空文庫

一

ガラツ八の八五郎が、その晩むこいり 賀屋勘兵衛。嫁はその一粒種で、浮氣つぽいが、綺麗さでは評判

祝言の相手は金澤町の酒屋で、この邊では有福の聞えのある多
の高いお福といふ十九の娘、——これが本當の祝言だと、ガラツ
八は十手捕縄を返上して、おほだな 大店の賀養子に納まるところですが、
さんねんが 残念乍らそんなうまいわけには行きません。

實際のところは、その晩賀入りの行列などを組んで歩いたら、
命を奪られるかも知れないといふ、——眞實の賀、仲屋のせがれ 伴錦

太郎らうに頼まれて、いや／＼乍らガラツ八は、聶入の贗物になることを引受けさせられてしまったのです。

この頼みが持込まれたとき、さすが暢氣者のんきのガラツ八も、再三辭退しました。が、錦太郎の頼みが如何にも眞劍で、涙を流さぬばかりに拜むのと、親分の錢形平次が、多賀屋の身しんしやう上、主人勘兵衛の評判から、娘お福の行状、それから聶入の仲屋の暮し向きから、錦太郎の人柄まで調べ抜き、『成程これは、うつかり祝言をさせられない』といふことが解り、自分からもガラツ八を説いて、『いざ三々九度の杯といふ時、眞物ほんものの聶入の錦太郎と入れ替はらせるから』といふ條件で、漸く聶入やうやの偽首にせくびになることを承知させたのでした。

祝言は多賀屋の身代にしては出来るだけつゝましやかに、當日の客は餘儀ない親類を五六人だけ、智入りもほんの型ばかりといふことにして、偽首の八五郎が、なかうど仲人寶屋祐左衛門夫婦に護られ、駕籠の垂を深々とおろして、多賀屋へ乗込んで行つたのは、秋の宵——むつはん酉刻半そこ〜といふ早い時刻でした。

途中は平次の子分や、ガラツ八の友達が多勢で見護り、行列は先づ何の障りもなく多賀屋の門口を入りました。さは紋切型の挨拶を上まじめの空に聞いて、奥へ通されると親分の平次が、恐ろしく眞面目腐つた顔をして迎へてくれます。

「どうだい八、満更悪い心持ちやあるめえ」

最初の平次の言葉はこんな調子でした。

「變な心持ですよ、親分」

「あやかりものだよ、——化け序ばっいでにもう少しその儘にしてゐてくれ。眞物の聳は陽が暮れると直ぐ此處に來て居るが、肝腎かんじんの嫁の支度が出来ない。三々九度はいづれ一刻も後のことだらう、その時はお客様で鰻腹たらふくの呑むが宜い」

「呑んだつてつまらねえ」

「ひどく落膽がっかりするぢやないか、——だがな八。聳にもよりけりだが命を狙ねらはれる聳なんてものは、あまり有難くないぜ」

「有難くなくなつて、偽首よりは器量が良いぢやありませんか」

「まア、さう言ふな」

ガラツ八の不満は、平次も察しないではありませんが、斯かうす

るより外に術てのない切羽詰せつばつた情勢だつたのです。

「親分は、いろ／＼の事を調べたんでせう」

「まア、調べたつもりだ」

「誰が一體聳しんを殺さうなんて氣持になつて居るんで――」

聳しんの錦太郎が青くなつて平次のところへ飛込んだのは知つてゐますが、深い事情はガラツ八もよくは知らなかつたのでせう。

「金澤町の若い男は皆んなだよ」

「ヘエー」

「大きな聲ぢや言へねえが、よくもあんなに若い男と懇意こんいになつたと思ふ位だ」

「ヘエー達者な娘だね」

「祝言の晩錦太郎を打ち殺さうと言ひ出したのは三人ある」

「へエー」

「中でも氣違ひじみてゐるのは、やくざの信三郎と髪結かみゆひの浪藏
さ、—— 聶の錦太郎め奴、歩いて來るなら刀で向ふが、駕籠で來る
なら何處かに待ち伏せしてゐて、土手つ腹やへ槍をブチ込んでやる
—— つて、言つて居たさうだ」

「危ねえな、親分」

ガラツ八も少しばかり薄寒い心持になります。

「尤も、お前もつとには其處めえまでは聽かせなかつたよ、土壇場どたんばになつて、

聶の身代りになるのが嫌なんて言ひ出されると困るからな」

「呆あきれ返るぜ」

何んな仔細しさいがあるか解りませんが、杯さかづき事の始まる前、聾の支度部屋を占領して、平次はガラツ八相手にこんな無駄を言つて居るのでした。

「大丈夫だつたのかい、八。よく脇腹のあたりを見るが宜い、槍の棘とげなんか残つてゐると、後でとがめるよ」

「冗談ぢやない、槍の棘なんか立てられてたまるものですか、——本當にそんな危ない聾入だつたんですかい、親分」

ガラツ八も、濟んだこと乍ら、今更怖毛おぞけをふるひました。

「大丈夫だよ、吠える犬は噛み付かない」

「へエ——」

「その上、途中は二十人もの眼で見張らせたんだ。信三郎や浪藏

は指も差せるこつちやない」

「驚いたね、どうも。そんな話を聴くと脇腹がムツムツしますよ」

「三々九度の杯さかづきさへ濟んでしまへば此方のものだ。人の女房にな

つてしまつたお福のために、人殺しの罪を背負つて、お處刑臺しおきだい

に載つかるのはどう考へたつて智恵が無さ過ぎるよ、今晚一と晩だけ越せば天下泰平さ」

「そんな思ひまでして、あの錦太郎とか言ふ野郎は祝言をし度いのかね、男の切れつ端のくせに」

八五郎が少しく義憤ぎふんを感じたのも無理のないことでした。仲屋

の錦太郎といふのは、身しんしやう上こそ軽いが、なか／＼の好い男で、

金持の一人娘で、神田の指折りの綺麗首であるにしても、評判の

蓮葉娘はすつばむすめの聲には惜をしいほどの若者だったのです。

「多賀屋は神田で幾軒といふ分限ぶんげんだ、その上お福はあの通り美しい。大概たいがいのことなら無理をし度くなるだらうよ。それに、多賀屋の主人勘兵衛と、仲屋の先代は無二の仲で、やりませう、是非貰はうと約束し、藁わらのうちから證文を入れたり證人を立てたりしたほどの許いひなづけ嫁なんだとよ」

「不自由なことだね」

「町人はそれが何よりのほまれさ、約束を守るといふのは決して悪いことぢやない」

「本人の氣持などを其方そつちのけにね」

「大層今晚は機嫌が悪いやうだな、八」

「金澤町小町のお預けなんぞ喰はされると、大概機嫌も悪くなり
ますよ」

ガラツ八は全く以ての外の機嫌でした。

「ところで、盃事の支度はまだかな」

「親分はそんなにして居て構ひませんか」

「構はないとも、狙^{ねら}はれてるのは聾^ねだらう。その聾が此處に居る
んだもの、平次が斯^かう附いてゐるほど確かなことはないぢやない
か」

「全くね」

ガラツ八の八五郎は、照れ臭く袴^{はかま}の皺^{しわ}ばかり氣にして居ります。
どうもしびれが切れて叶はない恰好です。

「尤も、眞物の聲でなくて、お前は本當に仕合せだつたかも知れないよ」

平次は話頭を轉じました。

「へエ——？」

「あんな評判の蓮葉娘はすつばむすめのお守をして、一生踏ふみ付けられて暮すのは、樂な仕事ぢやないぜ」

平次の聲は小さくなりました。

「へエ」

「その上仲屋は十年も前に身代限りをして、近頃は其日の物にも困つてゐるんだ。錦太郎はどんなに齒はぎしりしても、多賀屋へ聲にでも入らなきや身の立てやうはない」

「――」

「親と親との昔々の約束は、お福を仲屋が貰つて、錦太郎の嫁にする筈だつたとよ。それが、仲屋の主人が死んで、身代が滅茶めちや々くになつて仕舞ふと、一人娘を嫁にくれとは言ひにくからう」

「成る程ね」

「尤ももつと錦太郎は腹の中ぢや面白くないかも知れないよ、――それに、聽えるかい、八」

「へエ」

「錦太郎には他に言ひ交かはした女があるんだつてね」

「太てえ野郎だね」

「でも、背に腹は代へられなかつたのだらう」

「俺なら背と腹を代へるがな」

「それは他人様ひとの言ふことだ、——おや？」

不意に平次は聴耳を立てました。

「何です、親分？」

「變な音がしたやうだ、——來い、八」

「あつしが行つても構ひませんか」

「その窮屈きうくつ袋ふくろと紋附もんつきをかなぐり捨てるんだ」

言ひ捨てて平次は飛出しました。かなり大きな構へですが、唐紙を二つばかり開けると、其處は嫁の支度部屋になつて居たのです。

二

「あつ」

^{あかり}
「灯だ、灯だ」

平次の聲が響くと、さすがに氣の付いたガラツ八は、
行燈^{あんどん}を提げて飛込んで來ました。

「嫁がやられたツ」

^{あかり}
灯の中に崩折れた花嫁姿、
^{ひぢりめん}
緋縮緬が血のやうに燃えて、それ

は凄まじくも華やかに浮いたのです。

「入つちやならねえ、入つた奴には皆んな下手人の疑ひがかゝるぞ。八、其處で頑張^{ぐわんぱ}つて、一々出入りの顔を調べろ」

平次の聲が響くと、廊下まで殺到した群集が、雪崩なだれを打つて引返します。

「私は構はないでせう、親分」

その跡に取り残されて、おろ／＼して居るのは眞物ほんものの聶、仲屋の錦太郎でした。二十五六の華奢きゃしゃな男、青い顔をして、激動に顫へて居りますが、性根はなかくの確りものらしくもありません。

「いや、こいつは聶殿に見せる幕ぢやねえ。親御の勘兵衛さんだけ入つて下さい——それから町内の外科を大急ぎで頼むんだ、深ふ傷かただが、命は——」

平次は手負を抱き起してフツと口を緘つぶみました。

「親分さん」

この時、漸く主人の勘兵衛が飛んで來たのです。

「大變なことになつたぜ、御主人」

「どうしませう、親分」

六十男の勘兵衛は、娘の後ろから恐るゝ差のぞきます。それでも、自分の身體で庇^{かば}つて、多勢の目から手負の姿を見せないやうにし乍ら――。

「八、何をぼんやりしてゐるんだ。曲者は外へは出られない筈だ、出口々々は先刻の俺の聲一つで、二十人の下つ引が固めてゐる。手前は錦太郎を見張つてゐるが宜い。自棄^{やけ}になつた曲者は何をやり出すか解らない」

平次の命令は周到を極めます。

そのうちに外科が来て、花嫁の傷をしらべました。傷は深くはないが、急所をやられたので、朝までの命がむづかしからうと言ふ噂が、誰からともなくパツと家中に傳はります。

手負を外科と主人に任せ^{まか}た平次は、花嫁の支度部屋から出發して、縁側へ、庭へと調べて行きました。此道以外は人目の關が幾重にもあつた筈ですから、どんな忍びの名人でも、人に見とがめられずには通れなかつた筈です。

たつた一つの^{てしよく}手燭で、平次は實によく調べて行きます。生^{なまじ}

濕^めりの庭には^{あつら}逃へたやうに足跡があつて、それがかなり大きい

ことや、突當りの木戸は外から簡單に^{わかぎ}輪鍵の外せることを見極め、

「ゐるか」

靜かに聲をかけると、

「親分」

木戸の外から應^{こた}へた者があります。言ふ迄もなく下つ引の一人。

「誰も出た者は無いな」

「ありませんよ、親分」

「誰でも構はない、外へ飛出さうとする者があつたら、遠慮無しに縛り上げてくれ」

「へエ——」

「御苦勞だな」

平次は言ひ捨てて元の縁側に歸りました。

「おや？」

見ると、其處にも泥の足跡が——よく拭き込んだ縁の板を薄く染めて居るではありませんか。足跡を追つて行くと、眞つ直ぐに花嫁の部屋に入つて行きます。

念の爲にツイ傍の上便所の扉をあけると、二本燈心の薄明りで、
——草履ぎゅうりが一足。手に取り上げて裏返すと、生なまじめ濕りの苔こけくさ臭い土が一面に附いてゐるではありませんか。

「親分」

不意にガラツ八が顔を出しました。

「何だ、八？」

「刃物を見付けました」

手拭に包んで來たのは、
あひくち 匕首がひとふり 一口、切先が血に染んで、
 少し刃こぼれがあります。

「何處にあつたんだ」

「あつしが居た部屋の花瓶くわびんの中ですよ」

「誰が見付けたんだ」

「錦太郎が氣が付いたんで——」

「馬鹿ツ、——その錦太郎を見張つて居ろと言つたぢやないか」
 平次の聲は急に激しくなりました。

「だって、親分」

「何がだってだ、——刃物なんぞ、何處にあつたつて構ふものか、
 錦太郎に間違ひがあつたらどうするつもりだ」

「へエ——」

ガラツ八は不平らしく引返しました。暫くその後ろ姿を見送つて居た平次、何を思ひ付いたか、猛然として後を追ひます。が、それも及びませんでした。ガラツ八が一寸眼を離れた間に、事件は思ひも寄らぬ方へ急展開をしたのです。

「あツ、やられたツ」

ガラツ八の聲が突つ走ります。

「やつたな、畜生ツ」

飛込む平次。先刻まで平次とガラツ八が居た部屋に、錦太郎は半顔血に塗れて、氣を喪つて居たのです。
まみ
うしな

「どうした」

「氣をしつかり持て」

平次はそれを後ろから抱^かへて、あり合せのぬるくなつた茶を呑ませました。

「あ、有難うございます、もう大丈夫です」

錦太郎は極り悪さうに居^ゐ住^ずを直します。

「どうしたといふのだ」

「何處からともなく、こいつが飛んで來ましたよ。頬に當つたことまでは知つて居ますが——面目次第も御座いけません。私は氣が弱いんで」

錦太郎は恥かしさうに首を垂れます。切られたのは左の頬先、ほんの引つ掻きほどですが、潮時と見えて、血が顔半分を染めて

居ります。——尤も錦太郎が夢中で傷を押へた手で汚よごしたせるかも知れません。

刃物はガラツハが差して來た、犬おどかしのやうな脇わきざし差。こいつは聳入の恰好には無くてならぬ道具ですが、先刻さつき此處へ抛はり出して、嫁の部屋へ驅付けたのを、曲者は早速利用して、縁側から抛はつたのでせう。

「曲者の顔を見なかつたのかい」
傷を見乍ら平次は訊ねました。

「後ろから抛はられたんで、何んにも見ません」

「そいつは災難だつたね。もつと尤も、大難が小難で濟んだやうなものだ。幸ひ、町内の外科が來て居るから、手當して貰ふがよからう」

「有難うございます」

「ところで、曲者はいよく家の中に居るに決つたぞ。床を剥ぎ、天井へ潜り込んでも捜し出さう、八」

「おーい」

「何處に居るんだ」

「押入の中ですよ」

八五郎の返事は陰に籠りました。

「その意氣だ、しつかり捜せ、——外から二三人呼び入れて手傳はせても宜い」

疑ひは三人にかゝりました。

多賀屋の外を、ウロウロして居た、やくざの信三郎と、髪結の浪藏と、——これはお福の甘い言葉に取り逆^{のぼ}上せて、是が非でも祝言^{さまた}を妨げようといふ仲間——。

あとの一人は、多賀屋の番頭で品吉、三十そこくの平凡^{へいぼん}な男ですが、これもお福の笑顔に釣られて、多賀屋の養子になれるものと思ひ込んでゐた男でした。

三人とも機會がありました。が、便所の草履^{ざうり}をはいて細工をしたり、ヒ首^{あひくち}を髻の部屋の花瓶^{くわびん}に入れるやうなことは、品吉でなければ出来ない藝當です。

「此野郎ですよ、親分。思ひ切り引叩ひつぱたいて見ませうか」

聾たけだかから岡つ引に引抜ひきぬいたガラツ八は、品吉を縁側に引据ゑて威ゐ

猛高になります。

「待てく、もう少し考へてからにしよう。家に居る者が怪しい
となると、手代、下女、下男、それからお前も俺も、聾の錦太郎
も怪しくなる、——こいつはそんな浅墓あさはかな企みぢやあるめえ。

その番頭は下つ引に見張らせて置け、——ところで曲者は錦太郎
を殺すつもりは無かつたかも知れないが、——お福は確かに殺す
つもりだつた、——お福を殺して一體誰まうが儲かるんだ」

「——」

平次が變なことを言ひ出すのを、ガラツ八は縁側から聽いて居

りました。

「お福が死んで、一番損をするのは誰だ」

「父親と聶の錦太郎ぢやありませんか」

ガラツハの應へは素直で簡明です。

「ところで今は何刻なんどきだらう」

平次は又變な事を訊きます。

「亥刻半よつはんですよ、親分」

「あと半刻で明日か」

「――」

「明日は戌いぬで佛滅ぶつめつで、やぶるといふ日だ。祝言には一番嫌はれ

る」

「それが何うしたんで、親分」

「明日祝言がいけないとなると、今日のうちでなければなるまい」

「誰が祝言をするんで？ 親分」

「多賀屋の娘お福と、仲屋の伴錦太郎だ」

「えッ」

平次の言葉の意外さに、驚いたのは、隣の部屋で外科に手當をして貰つて居る錦太郎自身でした。

「お福は深傷ふかでだが、折角此處まで運んだ祝言、息のあるうちに盃事がしたいと言ふのだよ。しをらしい望みぢやないか。父親の勘兵衛は、涙なみだなが乍らにその支度をしてゐる。幸ひ聶の錦太郎は淺あ傷さでだ、子刻このつ前に祝言の盃事をして、死んで行く娘に安心させよ

うと言ふのだ」

「――」

ガラツ八と錦太郎はゴクリと固唾かたづを吞みました。事件のあまりに不思議な展開に、考へることも、異議さしはさを挟むことも出来なかつたのです。

「この上に妨さまたげが入つてはいけけない。浪藏と信三郎と品吉は縛つてあるが、この上何處ねたばに寢刃ねたばを合せてゐる者が無いとは限らない。善は急げだ、手當が濟んだら行かうか」

平次は斯う錦太郎と八五郎を促うながし立てるのです。

四

その夜の婚禮は、世にも不思議なものでした。

多賀屋の二階二た間を打ち抜き、善美を盡した調度の中に、まば眩
ゆいばかりの銀燭に照らされて、凄まじくも早はや桶をけが一つ置いて
あつたのです。

きんぴやうぶ金屏風、島臺、世の常の目出度いづくめの背景の中に、それ

はまた、何と言ふ恐ろしい取り合せでせう。

早桶の中に、なかうど仲人たからや寶屋祐左衛門夫婦、多賀屋の主人勘兵衛、

親類五六人、老番頭宅松が左右に居並びました。

一步、この席に入つた錦太郎の顔色は、さすがにサツと變つた
のも無理はありません。

「これは？」

ツイ唇をついて出た言葉、頬の色は半面を包んだ繻帶ほうたいよりも白く見えます。

あひは

「娘は到頭相果てました、曲者の手に掛つて、たつた十九で——」
多賀屋勘兵衛は絶句ぜつくしいく、教はつたせりふのやうに、斯う言ふのです。

「それで、私は、私は？」

「祝言の盃事をするのだ。あんなに焦こがれた仲だもの、せめて三々九度でも済まさないや浮び切れまい」

平次の聲は妙に荒つぽく響きました。

「——」

寂^{じやく}とした一座、兎もすれば、滅^め入^いるやうな緘^{かん}黙^{もく}が續きさうで
なりません。

「さア、早桶の蓋^{ふた}を拂^はつて、花嫁の最期の姿と對面してくれ」
平次は後ろからせき立てます。

「――」

思はず尻ごみする錦太郎。

「解らねえ聳^{しや}ぢやないか、三々九度は偽^{にせ}首^{くび}ぢや勤まらないよ」
ガラツ八は後ろから抱きすくめるやうに、早桶の傍の座に錦太
郎を引据ゑました。

「そんなに遠慮するなら蓋は俺が取つてやらう」
平次は早桶の側に寄ると、その蓋を取つて、桶ごとパツと引つ

くり返しました。

「あッ」

中から現はれたのは、お福の死骸と思ひきや、——血の附いた
あひくち 首と、ガラツハの脇差と、便所の草履と、それから、最後に
一つ、血に染んだ手てぬぐひ拭が一と筋。

「錦太郎、これを知つて居るだらう。手拭はお前の品に相違ある
まい、花嫁を殺して間もなく押入で見付けた品だ」

「——」

「さア、のがれぬところだ、白状せい。聾入むこいりの晩、花嫁を自分
の手で殺すとは何としたことだ、——言ひのがれは無用だぞ。此
の家は宵から大勢で取圍んでゐる、曲者は外から入る筈はない」

叱咤^{しつた}する平次、一座は思はず逃腰になつて、この不思議なクラ
イマツクスを見詰めて居ります。

錦太郎は唇を噛みました。が、暫く自分の心持を落着けると、
白々とした観^{くわんねん}念の顔を挙げ、キツと平次を睨み、それから主
人勘兵衛を見据ゑ乍ら、少しかすれたが、落着拂つた聲で斯^かう言
ふのです。

「白状する迄もあるまい、——殺したがどうした」

「錦太郎、それがお前の言ふ事か」

平次も思はずカツとなります。

「お、三千兩の身上を横取りされた上、江戸一番の蓮葉^{はすつばむすめ}娘と
添ふ位なら——俺はどんな事でもする」

錦太郎の聲は次第に疳^{かん}が立つて、引裂^{ひきさ}かれるやうな調子になります。

「宜い心掛けだ、——が、お前は誰を相手にして芝居を打つてゐるか忘れたんだらう、——俺のところへ驅け込んで、髯^{くさ}の身代りを頼んだ時から、俺は臭いと睨^{くさ}んだよ。手を盡して調べ抜いて、萬に一つの手拔りの無いところまで運んで置いたとは知るまい、——毘^{わな}に陥^おちたのはこの平次ではなくて、お前だつた」

「それほど用心深い錢形平次が、お福の殺されるのを知らずに居たらう」

錦太郎は勝利感に陶醉^{たうすゐ}して亢^{かう}然^{ぜん}となりました。

「よし、その氣で居るなら逢はせるものがある、——それ」

平次の手が動くと、錦太郎の後ろの金屏風きんびやうぶが取拂はれました。その奥に置かれたやうに坐つて居るのは、何と、錦太郎が殺したと思ひ込んでゐる、お福の健すこやかな姿ではありませんか。

「あッ、お前は、お前は」

驚く錦太郎。

「驚いた錦太郎、聲に身代りがあれば、嫁にも身代りがある事に氣が付かなかつたらう。お前があひくちヒ首で突いたのは、忠義な下女のお常だ。振袖の下へ鎖帷子くさりかたびらを着せて置いたので、力ちから任まかせて刺さしたヒ首も、五分とは斬らなかつたよ」

「――」

錦太郎は何べんかお福に飛びかゝりさうにしましたが、その都つ

度、平次の眼に威壓されて、キリキリと齒を喰ひしばるばかりです。

「便所の草履をはいて、庭木戸を開け、曲者が外から入つたやうに見せかけたり、八五郎の脇差で、自分の顔を斬つて、自分の身體に附いた血を胡麻化したりしても、この平次の眼を騙すことは出来ない」

「――」

「お前は――」

續ける平次の聲を遮つて、錦太郎の怒りは爆發しました。

「止してくれ、俺はその豚の仔のやうな雌と祝言せずには済んだだけでも澤山だ、――何でえ、岡つ引のくせに。何も彼も見抜いた

つもりでも、人の心の見透しはつくまい」

五

「それがどうした」

静かに迎へた平次、このたけり狂ふ男に、もう少し事情を説明させる必要があつたのでせう。

「何も彼も見抜いても、多賀屋勘兵衛の悪企みだけは見抜けなかつたぢやないか」

「何？」

「言つてやらう、——その多賀屋勘兵衛は、今から十年前、死に

かけてゐる俺の父親を騙し^{だま}、親切ごかしに、仲屋の身上を皆んな取上げてしまつた大悪黨だ」

「嘘だ」

勘兵衛は不意に呶鳴^{どな}りました。よく光る頭から、ポツポツと湯氣が立つて居ります。

「――」

平次は黙つてそれを押へたまゝ、一方、錦太郎の言葉を續けさせました。

「俺が成人するまでといふ約束だつた、――證人はうんとある、現に此處に居る仲人^{なかうど}の寶屋もその證人の一人になつて宜い筈だ。取上げた金は三千兩、――この錦太郎が成人すれば返す筈のが、

はたち 二十歳になつても二十五になつても返さない。お蔭で俺は仲屋の暖簾のれんと貧乏を背負しよつて、血の出るやうな苦勞をし乍ら育つた」

「――」

「父親の遺言ゆゑごんじやう状は寶屋が預つて居る。それには、お福とこの錦太郎と一緒にする約束が書いてある筈だ。萬一、二人が一緒にならない時は、三千兩の金は利息をつけて俺に返さなければならぬ。十年の利息をつけて、三千兩の金を返すことは、今では多賀屋の身代を振つても出来ないことだ」

「――」

「お福を俺の嫁にしても、行く／＼は仲屋のものは仲屋に返さなければなるまい。――惡智惠のたけた勘兵衛は、俺を聲にして多

賀屋の養子に直し、難癖なんくせをつけて追出すことを考へた、——賣ば

いたこんじやう女根性ねじやうの——江戸一番の性悪娘を、この錦太郎に押し付け、

嫌いや應言おうごうはせぬ祝言させようといふのは、皆んなそのためだ。俺

は斷つたとも。一應も二應も斷つたが、——十年越の借金を拂つ

て、母一人を安穩あんのんに養ふためには、斷つてばかりも居られなか

つた。——口惜くやしいが俺は承知した。言ひ交した女には因果いんぐわを

含めふく、——母にも觀念して貰つて——」

錦太郎は泣いて居りました、苦澁くじふの色が顔一面の筋肉を痙攣けいれん

させて、聲のない嗚咽をえつが、時々激情の言葉を吃どもらせませす。

「それから何うした」

と穩やかに平次。

「俺は捨鉢になつた。が、母が生きてゐるうちは、命を捨てて多賀屋へ斬込むわけにも行かない。お福が江戸一番の蓮葉娘で、大勢の馬鹿な男に騒がれて居るのを幸ひさいは、親分に頼んで見代りの聶を仕立てて貰ひ、俺はそつと此處へ來て、お福を殺す工夫をした。大身代を繼ぐ花聶が、金澤町小町と言はれた嫁を、婚禮の晩に殺す筈はないと世間では思ふだらう」

錦太郎の言葉は次第にか細い述じゆつくわい懷になつて、ともすれば途切れます。

「それから？」

平次はもう一度靜かに促うながしました。

「お福さへ居なきや、俺は勝手だ。親父おやちの遺言ゆゑん狀じやうがでて、

三千兩の身しんしやう上を受取るだけで、何の怖いこともない」

「――」

「細工が過ぎて親分に見現はされた、――口く惜やしいが仕方がない。サア、縛つてくれ、磔はりつけ刑にでも火焙ひあぶりにでもしてくれ、――その代り、萬一俺の母親が餓死うゑじにするやうな事があつたら、俺は死んだつてお前達を安穩あんのんには置かないぞ」

紋附姿の錦太郎が、身を顫はせ、疊を叩いて斯う言ふのです。
「嘘だく」

抗辯もしどろもどろに、多賀屋勘兵衛は立つたり坐つたりして居ります。

誰ももう、口を利く者ありません。

平次は一座の空氣を、慎重に味ひ盡しました。善惡邪正が、鏡に映るやうに判つて行くやうな氣がします。

「八」

「へエ——」

突如、平次に呼ばれてガラツ八は入つて來ました。

「この家は出口々々を塞いふさでゐるだらうな」

「へエ——、下つ引が五六十人、十重とへはたへ二十重に圍んでゐますよ」

「よし——」

八五郎の應への常識以上に大袈裟おほげさなのを、平次は笑ひもせずになづきました。

「何をやらかすんで、親分」

「俺の指した野郎を縛れ」

「へエ——」

「それ」

平次の指は、ピタリと、なかうど仲人寶屋いう祐左衛門の胸を指したので
す。

「御用ツ」

「わツ、御勘辨。私は、私は何にも知りません」

あわてた寶屋、疊の上を額で泳ぐおよやうな恰好になるのを、ガラ
ツハは襟髪を取つてピタリと引据ひきすゑました。

「野郎ツ、神妙にせいツ」

「申します、申します。皆んな申上げてしまひます。——多賀屋

さんには數々のお世話になつて居るので、斷り切れなかつたのでございます。——仲屋さんの先代の遺言状ゆゑごんじやうは、すぐ此場で錦太郎さんにお渡し申します、——御勘辨を。願ひ」

寶屋祐左衛門は、懷中から紙入を取出して、ガラツ八の腕力の下に、何やらモゾモゾ續けて居ります。

「多賀屋さん、この祝言は取止めにしても異存いぞんはあるまいな」

平次は勘兵衛の方へピタリと向きました。

「それはもう、親分さん。娘の命を狙ねらふ者を養子になどは——」
勘兵衛はブルブルと頭を振りました。

「よし／＼。それでは、仲屋の先代の遺言通り、三千兩に利息をつけて、この錦太郎に返してやつちやどうだ。いやならお白洲しらすへ

持出すが」

「それは親分、殺^{せつ}生^{しやう}ですよ。三千兩に十年間の利息をつけて出しちや、多賀屋が潰^{つぶ}れてしまひます」

勘兵衛は泣き出しさうです。

「貧乏になるのも洒落^{しや}れてゐるぜ。世帯の苦勞をさせると、第一娘がもう少し惻^{りこ}口になるよ、貧乏の味のよさを知らないのが金持の落度なんだ」

「親分、それは可哀想ぢやございませんか」

「まだく可哀想な人間は、廣い世界にうんとあるぜ」
平次はなかく譲^{ゆづ}りさうもありません。

「親分」

錦太郎は顔をあげました。

「何だい」

「お禮の申上げやうも御座いません。——親分のお心持はよく解りました。さうとも知らずに、御手敷を掛けた上、數々惡口を言つて——」

錦太郎はボロボロと涙をこぼし乍ら、疊の上へ雙手もろてを突くのです。

「氣が立つと、餘計な事も言ふものだ。そんな事は心配しなくて宜い」

と平次。

「親分、——私も此上慾張よくばつたことは申しません。あの化け娘と

一緒にならずに三千兩返して貰へば、それで澤山です、——利息なんか、一文も要りません」

「それは本氣か、錦太郎」

平次は眉を^{まゆ}開きました。錦太郎の言葉が、此空氣の中では、かなり豫想外だつたのです。

「本當ですとも、親分。六十になる母親の老^{おいさき}先を幸せにするだけなら、三千兩でも多過ぎる位で、あとは私が精一杯働きます。

何んなら——」

「よし、それ以上負けさしちや、多賀屋も冥^{みやうり}利が悪からう。お前は思つたより良い男だ、手の混^こんだ人殺しなんかするより、心を入れ替へて商賣でも勵^{はげ}むがよからう。下女のお常の引つ搔^かき

位は、俺が何とかしてやろう。なア、多賀屋」

「へエ」

「三千兩の利息で、膏藥がどれ位買へると思ふ」

平次はそんな無駄を言ひ乍ら、もう歸る支度をして居りました。

×

×

×

「溜飲りういんが下がつたぜ、親分」

曉方近い街、女房のお靜が待つて居る家路を急ぎ乍ら、平次は應こたへました。

「氣の毒なのはお福さ、心柄と言ひ乍ら、あれぢや江戸中に貰ひ手もあるまい」

「あつしは親分」

八五郎はニヤリニヤリとほろ苦い笑ひを見せます。

「お前も氣の毒だよ、たま／＼祝言をする事になると思ふと、それが身代りだつたりして、——でも、あんな蓮葉娘はすつばむすめと祝言しなくて飛んだ仕合せよ。そのうちに、煮豆屋にまめやのお勘ツ子にでも當つて見ねえ、あの娘の方が餘つ程筋が宜いぜ」

「チエツ」

八五郎は大きな舌打を一つしましたが、腹の中では怒つてゐるわけではありません。親分平次の今晚の裁きさばの鮮やかさあざに、すっかり陶醉して居たのです。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第十六巻 笑ひ茸」同光社磯部書房

1953（昭和28）年9月28日発行

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

ガラツ八祝言

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 野村胡堂
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>